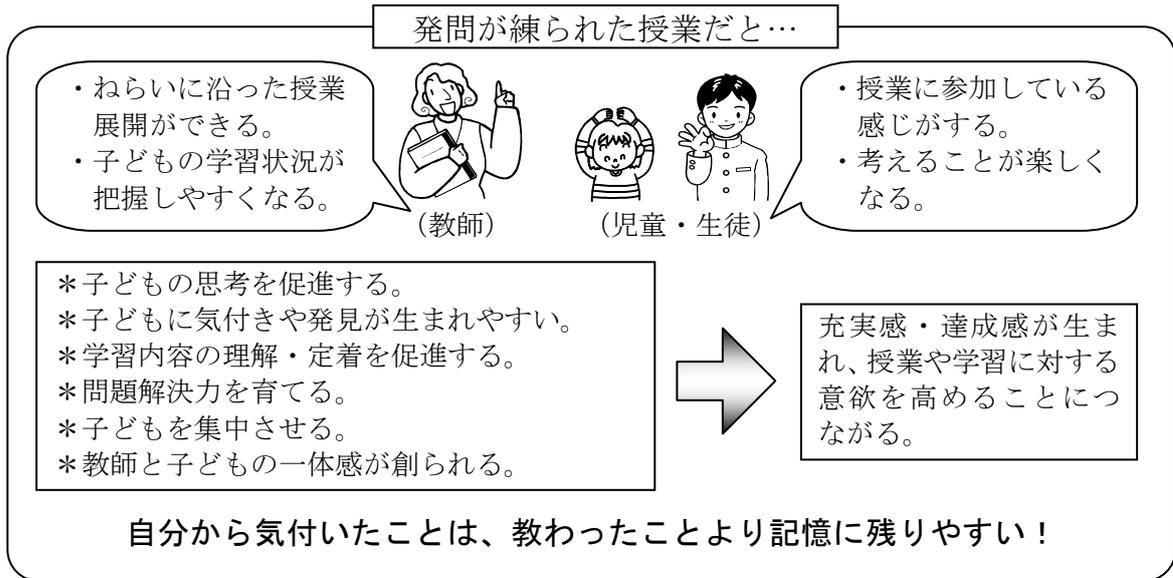


Q. 10 発問がよくないためか、子どもたちからうまく意見を引き出すことができません。発問をする際に気を付けることは何ですか。

A. 発問とは、授業中に教師が行う意図的な問いかけ（指導言）のことをいい、授業構成の核となる非常に重要な指導技術です。十分な教材研究や板書計画に合わせて、学級の実態に応じた発問を考えることが、子どものより深い思考を促し、自分なりの考えをつくり出す手だてとなります。

以下は、『発問が練られた授業』を展開した場合のイメージ図です。



### ○発問によって思考力を育てる

実際の授業において、教師の一方的な説明や指示の時間が多くなり過ぎると、子どもたちが考える場面がなくなってしまう授業が上手くいきません。このことを改善していくには、子どもの思考に合わせた発問を投げかけることが大切です。子どもが学習課題について考えたり、友だちの考えと自分の考えを比べてみたりするなど、学習場面に応じた発問を展開していきながら考える力を育てていくようにしましょう。

### ○『閉じた発問』と『開いた発問』

一般的に発問は、『閉じた発問』と『開いた発問』があるとされています。

閉じた発問とは、YES か NO で答えられるものか、答えが1つしかないものです。閉じた発問は、開いた発問の前段階として用いると有効で、授業にリズムやテンポを生み出すことができます。しかし、閉じた発問だけでは、子どもたちの思考力を刺激するものにはならず、授業が単調なものになってしまいます。

例えば、次の2つの発問例を比較してみてください。

- ① 草食動物の目は、顔のどこについていますか？
- ② 草食動物の目が顔の横についているのは、なぜだと思いますか？

①は、閉じた発問の一例で、答えは「横か前についている」であり、覚えていなくても答えることができます。②は、開いた発問であり、草食動物が生きていく環境について考えなければならない問いとなっています。

このような問いを働きかけることによって、子どもたちは、肉食動物と草食動物との関係を思い浮かべ、草食動物の生活環境を想像しながら答えを考えることとなります。

## ○効果的な発問づくりのポイント

### ◇ねらいに即して発問を使い分ける

発問を考える際に気を付けたいことは、「ねらいに対して何に気付かせ、何を考えさせるのか」ということです。

以下に挙げる7つの例について、教材や授業展開に応じた発問を取り入れながら、子どもの主体性や学習意欲を引き出すようにしましょう。

\* 本時の課題解決に必要な既習内容に気付かせる

例) 「形容詞って、どんな働きをするのかな？」

\* 根拠を明らかにする

例) 「なぜそう思ったの?」「どのように考えたの?」

\* 相違点や類似点を明らかにする

例) 「どこが同じで、どこが違うかな?」「何に似ていると思ったの?」

\* 思考作業のプロセスを確認する

例) 「どうやって解いたの?」「どんな式を立てたの?」

\* 解決の糸口を見つける

例) 「どうなれば良いと思うのかな?」「どうなれば解けそう?」

\* 解く手順を定着させる

例) 「まず何をするのかな?」「次は、どのようなことが考えられるかな?」

\* 理解の確認

例) 「ここの部分を、先生が今言ったように説明してみて?」

### ◇ねらいを明確にして、応答を予測する

授業の核となる『思考を深める発問』については、本時のねらいに迫るものであることが不可欠です。言い換えれば、ねらいが定まっていなければ、子どもの思考が深まらずに、表面的な議論で終わってしまうということです。

そのためには、「この発問をしたら、子どもはどのように考えるだろうか」「この発問に対して、どのような回答が出てくるだろうか」などと事前に検討しておくことが大切です。また、予想した回答を「どのような順序で取り上げていくか」ということも考えておくことが必要でしょう。



### ◇子どもの実態に合わせる

よい発問をつくっても、子どもの実態に合ったものでなければ期待した授業展開にはなりません。例えば、課題の内容を高く設定した発問では、一部の子どもだけの議論になってしまったり、その逆であれば、進んでいる子どもの意欲が低下したりすることにもなりかねません。

ポイントとしては、事前に子どもの興味・関心や考え方の傾向を把握したり、子どもの既習事項や内容を確認したりするなどの準備をして、発問を構想していくことが大切です。また、発問後は個々の子どもの様子を観察するために、机間指導などの支援を行うことにも配慮しましょう。【Q.12 参照】

### ◇子どもが自ら疑問をもつよう教材や教具を工夫する

子どもの思考を発展させるためには、発問だけではなく、教材や教具を工夫することも大切です。例えば、絵や写真のように伝えたい内容の具体物をはっきりと提示することで、子どもの驚きや疑問が生まれ、そのことが学習課題となる場合もあります。また、発問と併せて用いることで、子どもの思考をより一層深めることにもなります。



### ◇発問を吟味する

子どもの思考を妨げたり、子どもの思いや存在を軽視したりするような発問には気を付けたいものです。

#### \* 矢継ぎ早に問いかける閉じた発問

例)「登場人物はどんな気持ちだったのかな?」「うれしかったのかな? 悲しかったのかな?」「なぜ、そのような気持ちになったのかな?」というように次々と発問を投げかけることは、子どもの思考を妨げてしまいます。発問を構成する際は、子どもの実態を考慮し、言葉を厳選して、明確な意図をもって問いかけましょう。

#### \* 答えを言ってしまう発問

例)「さっき聴いた音楽は、だんだん音が大きくなって迫力があつたよね! みんなはどのように感じたかな?」のように、教師が意図とする答えや感想を含んだ発問は、子どもの思考を促すことにはつながりません。例えば、「さっき聴いた音楽は、音がどのように変化したかな?そしてどのように感じたかな?」というように、発問を換えて問いかけることが必要でしょう。

#### \* ヒントが具体的過ぎて、作業のようになってしまう発問

例)「抜き出しの答えは、10行目から12行目です。わかった人は手を挙げて!」のような発問は、出すヒントの範囲を限定し過ぎて、子どもたちは作業的な活動になってしまいます。

#### \* 子どもの思いや存在を無視した発問

例)「今日はリコーダーで△△△△を演奏しますよ! ○○さん、今日の授業では何をやるの?」など、必要とする学習場面を除いては、あまり単純な発問や脈略を無視した発問は避けましょう。

### ○学習基盤の大切さ

子どもが主体的に取り組む授業展開を考えたときに大切にしたいことは、誰もが発言したくなるような環境を整えることです。一部の子どもによる発言ばかりが取り上げられる授業では、子どものつぶやきや自由な発言が制限されてしまい、多様な意見が共有されにくくなります。

子ども一人一人の思いが学級全体で共有され、安心して発言できるような環境を整えるよう、日頃から子どもたちの様子に目を配ることも重要なことです。

